ムックル[※4]をやってみよう … 独特のひびきに心をゆだねる

ムックル[※4]は、アイヌ民族の伝統的な楽器の一つです。世界各地にある「口琴」の一つで、口もとで音を鳴らして口の中でひびきを大きくし（共鳴させ）、口の形や息などによって曲をかなでるものです。

今よく目にするものは竹でできていますが、チシマザサやノリウツギ（アイヌ語でラスパニ）などで作られることもあったようです。

ムックルを手にしたら、まずは口に当てないで、音を出せるようになりましょう。コツは、少しななめ向こうに糸を引くことと、引っぱったらすぐ糸をゆるめることです。なれないうちは、けっこう力がいります。

「ビョーン・ビョーン・ビョーン…」と小さいながらも、音がひびくようになったら、動かさない方の手をほおに固定して、口を半開きにします。さっきつかんだコツのとおりに糸を引くと、ひびきが大きくなるのがわかります。

あとは、口を大きくしたり小さくしたり、あるいは息をふきかけることで、音程や音色を変えることができます。あまりうまくできなくても、自分で鳴らすムックルの音色は体と心の中にひびきます。

ムックルの演奏をする東泉園（上士幌町）の川上けさ子さん。右後ろは帯広百年記念館（※5）の内田学芸員。（『イオル体験ツアー』より）

（左）「イオル体験ツアー」で川上さんの指導を受け、ムックルを練習する（上士幌町・東泉園）。（右）ムックル（幕別町蝦夷文化考古館 →p150）。

アイヌ文化の手工芸 … 自然と交易から産み出される服や道具

服や道具をつくる手工芸の技術も、親から子へと伝えられながら、地域ごとに特ちょうある文化を発展させました。材料には、草や木など身近な自然のものと、交易で手に入る、本州や大陸のものがありました。

布は、本州からきた木綿の布を使うほかに、木の皮のせんいやイラクサなどの草のせんいから織られました。

オヒョウ（アソピウ）という木の内皮からとったせんいで作った服は「アットゥシ」といいます（→p141）。木の皮をむき、内側のやわらかい皮を水や温泉につけてふやかし、大変な手間をかけてせんいを取り出しました。

衣服には、ししゅうでもよう（文様）が入れられ、アイヌ文化のシンボル的な存在となっています。

布やししゅうをぬうための針は、交易によって手に入れるもので、大変貴重でした。女性は細工した「針入れ」に入れ、大切にあつかったといいます。幕末[※6]の探検家、松浦武四郎（→p142）は、世話になるアイヌの人たちへのみやげとして針をわたして、大変喜ばれました。

また、「チタルペ」といわれる文様入りのゴザは、家の壁や祭だん（ヌサ：→p134）をかざりました。チタルペは、沼などの水辺に生えるガマ（シキナ）という草に、オヒョウやシナノキ（クペルケプニ）といった木の内皮を染色したテープ状のものを織りこんで作られました。

こうした、ぬう・編む・織るといったことは、女性の仕事でした。

男性の手工芸は、彫刻や木工です。狩りのための道具や小刀、タバコ入れなどが、さまざまなデザインで作り出されました。

服に入れられたししゅう（釧路地方）。（『山本多助エカシ展』より）

細工された小さな刀（マキリ）。（上士幌町・東泉園）

※4　ムックル：本格的な演奏は、帯広カムイトウウポポ保存会など、各地で伝承活動をおこなっている人たちの演奏や、安東ウメ子さんのＣＤ（幕別町教育委員会）などで聴くことができる。

※5　帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘２番地　電話 0155 - 24 - 5352　月曜日休館

※6　幕末（ばくまつ）：江戸幕府（えどばくふ）末期の略で、江戸時代終わりころのこと。